# 百々裏話（56）

おもて　あきら

〔多武峰の能―その六〕

前回に引き続き、香西精氏の「山田猿楽」の説をふまえながら論を進めたい。

◎**多武峰と大和猿楽**(2)…山田猿楽…

興福寺への四座参勤の慣行成立以前に既に始まっていたと考えられる多武峰と大和猿楽の結びつきの由来に関して、香西氏は、外山（宝生）座が元来多武峰寺附属の猿楽ではなかったかと推測された（前回の論旨要約の(ハ)）。外山の地（今は桜井市内）が多武峰に比較的近いことが主たる理由である。猿楽座の成立の背後に有力な寺社の存在を想定するのは、座の性質から当然視されてきたことであり、逆に、寺社に参勤・附属した猿楽座として、寺社近傍の座を考えるのも、自然な推測と言えるであろう。外山座の素姓については、従来も幾つかの説が出されている（次回に紹介することになろう）が、いずれも想像の域を出るものではなく、猿楽参勤の事実の明らかな多武峰に結びつけて考える香西氏の見解が、同じ推測ではあっても、より可能性に富むと言い得よう。しかし、地理的な条件から言えば、山田猿楽の住したと見られる磯城郡安倍村（今は桜井市内）の山田の方が多武峰にもっと近い。多武峰から西へ下って石舞台へ出、北上して山田へ至る道は、私は歩いたことがあるが、古くからあったはずで、交通の便もよかった。従って、多武峰に縁の深い猿楽としては、まず山田猿楽を考えるのが順序のはずである。

にもかかわらず、香西氏が外山座を第一に想定されたのは、山田猿楽は多武峰末寺の山田寺に附属していたと考える通説に従われたためである。だが、私はその通説に疑問を抱いている。観世・宝生両座の前身と見なされる山田猿楽の帰属は、能楽史研究上の大きな問題点であると思われるので、少し横道にそれるが、先にその点を吟味しておきたい。

山田猿楽とは、長男宝生大夫・次男生一・三男観世（清次）の三兄弟の父「山田の大夫」、及びその養父の「みの大夫」の系統の猿楽の通称である『〈申楽談儀〉』。その猿楽の居た山田については、伊賀の山田と見る説もあったが、大和の山田と見る吉田東伍博士や能勢朝次博士の説の方が、外山・出合・竹田などの関連猿楽の居住地との近接からも妥当と認められ、今日ではそれが定説となっている。そして、この山田猿楽と山田寺を結びつけて説いたのは、能勢博士の『能楽源流考』が最初らしい。博士は、次男生一の家名を再興した生一家に伝わった先祖の墓が大和の天台宗の山田寺にあったという伝承を追求し、それは磯城郡安倍村の山田寺であろうと推測し、山田猿楽はその地の猿楽座であったろうとの説を導き出された。必ずしも山田猿楽は山田寺附属だったと説かれたわけではないが、そう理解して差支えないような論旨である。以後別に異論も出ないまま、山田猿楽を山田寺附属と考えるのが通説のようになっていた。永島福太郎氏『中世文芸の源流』に「山田猿楽は山田寺の猿楽と見られるであろう」と言うのなどが、その一例である。

しかし、山田猿楽が活動したと見られる鎌倉後期から南北期へかけての頃に、山田寺は猿楽を附属するほどの寺院として存在していたであろうか。同寺は『日本書紀』文化五年（六四九）の条に名の見える古寺であり、現存する礎石がかつての規模の壮大さを偲ばせているが、平安中期には多武峰の末寺となり、鎌倉初期には既に荒廃していたようである。建久八年（一一九七）の奥書を持つ『多武峰略記』（群書類従）下巻「末寺」の条に、

山田寺　法号華厳寺……堂塔鐘楼経蔵等跡、今猶存之。

とある記事がそれを物語っている。「跡が今

も残っている」との文辞は、建久八年当時、今ほどではないにせよ荒れはてた状態になっていたことを示すと解さざるを得まい。織田得能氏の『仏教大辞典』も、「建久の頃諸堂荒廃し、その後沿革詳ならず」としている。だが能勢博士は、『多武峰略記』を引用しながらも、「建久八年以降に、再興の金堂講堂等のあった事は、七大寺巡礼記の山田寺の条によっても知られる」と、七大寺巡礼記を根拠として、南北朝の頃に山田寺は立派に存在していたと考えられた。なるほど、享徳元年(一四五二)八月の奥書を持つ『南都七大寺巡礼記』(『大日本仏教全書』)には、

山田寺　大和国十市郡

蘇我大臣建立寺也　金一間四面二階、金堂辰巳方ニ在蘇我大臣影

講堂

五間四面、安十一面観音像、又在丈六金銅薬師三尊、今興福寺東金堂本仏是也

とある。しかしこの書は、実際に寺々を巡礼して廻りながら記録したかの如き書名ではあるが、奥書に「以古記書写了」とある如く、古記録の書写、ないし古記に基づく編著であって、特に七大寺の末に列挙されている河原寺・法興寺・山田寺・橘樹寺の場合は、由緒ある寺の往昔の姿を古記録によって記載したものと解される。文治三年(一一八七)に、平重衡の兵火で焼失した興福寺東金堂を再建した際に、その本尊として興福寺衆徒が山田寺から奪ってきた金銅薬師三尊を、山田寺講堂のものとして記載しているのもその一証である。従って、右の記事を根拠として、享徳以前に山田寺が再建されていたと考えるのは、甚だ無理であると言わなければならない。大和地方の他の旧大寺の中世に於ける衰微の状況から推しても、多武峰末寺に零落していた山田寺が、建久の廃絶の姿から二階立ての金堂や五間四面の講堂を持つ堂々たる形に再建されることなど、あり得ないことのように思われる。旧跡を守る小庵程度のものは存在したであろうが(『磯崎郡誌』に永享五年に焼失したという由の山田寺はその程度のものであったろう)、猿楽座を附属するほどの規模の山田寺は、中世には存在していなかったと考えて然るべきであろう。

以上の見地から、山田猿楽を山田寺附属であったと考える通説は、訂正を要するものと思う。山田寺よりも、本寺たる多武峰寺との関係を考えるべきではなかろうか。

山田の地には、末寺山田寺があった所だけに、多武峰の寺領が存在していた。『談山神社文書』中には、永正七年(一五一〇)の「勧進検断目録」などに、山田・山田庄の名が散見し、それが寺領であり、阿倍村の山田であることに疑問の余地がない。中世の多武峰領は、減ることはあっても増加することはなかったようであるから、それは鎌倉時代からの寺領であったと解される。多武峰の最大の寺領だった桜井庄などに比較すると小さな所領であったらしいが、「勧進検断目録」は山田庄を筆頭にあげており、公文職(荘園の代官)の交代の際には山田庄の公文に限って多武峰宿老に挨拶する慣習があったことも同書から知られる。多武峰にとって山田庄は由緒ある寺領であったらしい。

そのような土地に住した山田猿楽を、多武峰と関係の深い猿楽であったと考えるのは、極めて自然な推測と言えよう。多武峰神事への参勤を主要な職務として成長した猿楽、つまりは多武峰附属の猿楽が、山田猿楽だったと考えてよいであろう。とすれば、観阿弥の祖父だった山田猿楽の「みの大夫」の活躍期は鎌倉末期のはずであるから、大和猿楽の多武峰参勤の始まりも、その頃まで遡らせて考え得ることになろう。

以上、山田猿楽を山田寺附属と見てまず外山座と多武峰の関係を説かれた香西説には反対したが、山田猿楽が多武峰に参勤したと考える点では、香西氏も私と同意見であり(前回要約(二)、外山座を多武峰附属と考える香西説には私も賛成なのである。それについては次回に述べよう。

(43・5・1)